

基本に立ち返る大事さ

日本人ピアニストの代名詞ともいえる存在の中村絃子さん(甲州市塩山生まれ)は今年、デビュー55周年を迎える。若くして注目を浴び、クラシック界の第一線を走り続けてきた中村さんの見た半世紀はどんな時代だったのか。秋に予定している山梨での久しぶりのコンサートを前に、演奏家としての日常、後進への思いなどを聞いた。

〈五味優子〉

若いころは年100回は開いていたというコンサート。日本人の小柄な体を補うパワーを維持するため、定期的に埋まる。トップランナーとして長く活躍する秘訣を問うと、「健康に恵まれたこと」といったってシンプルな答えが返ってきた。

日々好奇心を

演奏家として大事にしているのは「作品を通して何を語りたいか、聞き手に何を分かってもらいたいか」ということ。それを表現するため「日々好奇心を持って、あらゆること

厳しく批評

芸術は「満たされない思いや夢、理想を作品に託して表現すること」とも言う。「豊かで満たされた生活からは真に感動的な世界は生まれにくい」。その意味で、今の日本のピアノ界を「ぼつとしない」と厳しく批評する。

10月25日、甲府でコンサート

デビュー55周年記念の中村絃子トーク&コンサート「Shall we dance?」は10月25日午後2時から、甲府・コラニー文化ホール(県民文化ホール)で開かれる。華やかで情感あふれる演奏と、楽しいおしゃべりを楽しむ。

曲目はリスト「ウィーンの夜会第6番」、ショパン「アンダンテ・スピアナートと華麗な大ポロネーズ変ホ長調」、ムソルグスキー「展覧会の絵」などを予定。入場料はS席5000円、A席4000円、A席高校生以下2000円(未就学児の入場不可)。11日午前10時から山日YBS本社受付、コラニー文化ホール、ローソンチケットなどで発売する。

問い合わせは山日YBS事業局、電話055(231)3121。



「山梨でのコンサートは親戚が集まるような気がしてわくわくします」と話す中村絃子さん
—東京・港区の自宅

なかむら・ひろこさん 1944年甲州市塩山生まれ。59年に中学3年で日本音楽コンクール第1位特賞となり翌年、NHK交響楽団の世界一周公演にソリストとして参加。65年には第7回ショパン国際ピアノコンクールで日本人初の上位入賞を果たし、最年少者賞受賞者となる。2008年に紫綬褒章受章、09年に日本芸術院賞・恩賜賞受賞。